

昭和三十三年九月十九日第三種郵便物認可
昭和五十四年十二月十日発行(毎月十日発行)第三十九号

大阪教育

1979 12月号

特集・テレビッ子国際シンポジウム



大阪市教育委員会監修



初舞台

能楽のプログラムは、普通、能楽の間に、狂言をはさんで上演される。

また、間狂言といって、能楽の途中で、能の筋書の語りを狂言師がやる。

この間の説明によって、能の内容が観客に良くわかる。間狂言は能の引立て役をやっていることになる。

能には、田村の田村鷹、安宅の弁慶あるいは俊寛というように、歴史上の有名な人物が出て来るが、狂言には、特定の大人物は出てこない。

いちばん多いのは、主人と従者である。従者は太郎冠者である。主人は金持ちの家の主人か、大名か小名。それも江戸時代の大名や、大地主などという、おおげさな人物ではなく、そこにもある、ここにもあるという愉快なものなであり、小名である。

能衣装の金ピカに対して、狂言の衣装は、じみである。それに上演時間が短い。

世阿弥が能を大成したころ(一四三

〇)すでに、能と狂言は交互に上演されていた。

狂言は笑いの演劇である。みんな、楽しい笑いである。俗悪な笑いはない。演劇者も、演劇の中で哄笑場面が多いが、見ている人もまた、つい笑わされてしまうことが多い。

能楽が三曲、上演されるとする。三曲が、つづけてやられると、どんなに良いものであっても、観客はつかれてしまう。ところが、能楽の次に狂言が組まれている。それが交互にやられると、さらっと受け入れられて、楽しいものである。このごろ狂言がうけているのは、そんなところにも理由があるらしい。

能と狂言は兄弟か、兄弟とすれば、どちらが兄貴どちらが弟か。あるいは親戚であるとも考えられる。

ところが、内容は、ずいぶんちがっている。能楽には筋の通った物語りがある。謡曲の本が、そうである。

狂言は口伝といつて昔から、親子に、師匠から弟子に、セリフを口で伝えたものである。だから、その修業たるや大変な努力を必要とする。

十一月一日、大蔵流家元と、茂山、善竹両家合同で、大阪文化祭参加の朝日狂言会が三越劇場で開かれた。

このとき、寝音曲を演じたのは、人間国宝の茂山千作師と、ひ孫の茂山真吾ちゃんだった。千作師が真吾ちゃんを前に置いて、口伝の場面はよくテレビにもクローズアップされた。

十一月十八日、高槻の善竹舞台で、善竹玄三郎師が主宰する高和会の秋の発表会があった。

この会は、善竹玄三郎(二十四代大歳流家元の弟)師の元で修業したアマの人達であるが、どこへ出しても、はずかしくない芸達者が揃っている。

この日の曲の中に、業平餅というのがあった。この曲は、にぎやかな曲で門下生を中心どころが肩を並べて出場する。西謔、南謔、南徳子、村上二郎、畑中義雄、敷地屋、田中忠和等のセミプロの中にまじって、ことし四才四か月の善竹徳一郎ちゃんのデビューがあった。徳一郎ちゃん、善竹長徳師の子ども。長徳師の父は、玄三郎師。徳一郎ちゃんは玄三郎師の孫である。茂山千作師が、ひ孫の真吾ちゃんに芸をたたき込んでるように、玄三郎

師も、孫の徳一郎ちゃんをつかまえて、しごいている。

ところが、千壇は二葉よりかんばしである。徳一郎ちゃんは、お爺ちゃんにひどく、しごかれても、平気な顔で「よろしく、お願いします」と言っているあたり、サスガである。

シテの在原業平が、お供を揃えて玉津島明神へ参拝する。途中の茶屋で餅をたべ、代金を請求される。お金を持っていない業平は、お代のかわりに歌をよもうといつて、餅をかちん(歌賃)といういわれを語るが、亭主が承知しなない。そこで餅づくしを歌って餅をながめる。ところが、主人がこれを業平と知って娘を宮仕えにたのみ、娘を呼びに行つたすきに、餅をほっぽつてのどにつつかえる。もどつて来た亭主は、それを助けるが、こんどは、乙の面を着た美しい娘にひと目ぼれをし、業平は妻にもらいうける。ところがかすきをとつてみると、これはひどい醜女だった。そこで娘を傘持ちにおしつけるが、はねつけられる。業平は娘をつき倒して逃げるといふ内容。業平といふ男性を普通の男に落としたところが、この狂言のオチである。

内容を知ってか、知らないでか、徳一郎ちゃんは太刀をささげ、得意のポーズをとつて見守っていた。頼もしいデビューである。(岡本)